

# 横浜農業の現状を追う

①都市農業に社会的価値を  
②横浜を歩く

## ①都市農業に社会的価値を

大島千恵子

一—都市農業の視点  
二—横浜農業の実例

### 一—都市農業の視点

#### ①—横浜になぜ必要か

私は、横浜になるべくたくさん農地や山林が残って欲しいと思っている。その第一の理由は、横浜は既に人が多勢集まり過ぎて、住みづらい都会になりつつあると思うからである。農地や山林を残すことは、開発を抑え、人口の社会増を抑制することにつながると思うからだ。第二には、農業という産業は、人間にとって、「食糧」という一番大切なものを生産する尊い産業だと思うからだ（にもかかわらず、一般的には、農業が蔑視さ

れる傾向が強い）。戦争中、そして終戦直後と、国家的規模で飢餓を経験しながら、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」で、農業を日本の産業のお荷物と考えるような人が多いのは残念なことだ。第三に、自然が身近にあることは、この都市に生まれ育つ人達が、小さいときから、人と自然とが共存していくということについて、肌から学ぶことができると思うからだ。

#### ②—困難な農業の存続

けれども、こうした願望にもかかわらず、横浜に農業や山林を残すことは大変

むずかしいようだ。その理由は第一に、土地を欲しがっている人達が大変多いからだ。行政が公共施設や道路の土地を求め、都心に産業が集中し過ぎた結果として、住宅用地の需要が増してくる。

「ウサギ小屋」を何とかしようとするあがきに乗っかって、山林や農地の開発への圧力が強まる。第二に、第一の理由によって地価が高騰し、農家の営農意欲が失われていくことだ。農家が自ら進んで土地の値段が上がると、土地が売れるようになることを期待するようになる、ほとんどの場合、農業らしい農業は存続できなくなる。山林を持っていても、税金

ばかりかかって一文の足しにもならなければ、売りたいと考えるようになる。

#### ③—土地問題をめぐる圧れき

人口の増加は宅地、公共用地など、土地に対する需要を増大させる。しかし、土地は限りあるものであるから、需要が増え続ければ価格も上がっていく。地価が高いという庶民のいら立ちは、生産手段である土地をたくさん持っている農家への憎悪や反発へと向けられ、「あの人が土地を手放さないから土地が安くならないんだ」という不満となって表われる。農地以外にも、市民が直接利用でき

ない土地は他にもあるが(例・五二九haの米軍基地等)、農地への攻撃のみが声高に叫ばれているように聞こえるのは、ひとつには、日本の農業を工業製品輸出のためのいけにえにしようとする財界や、これを受けたマスコミのキャンペーンが、かなり一般市民にゆきわたっているためだといえるだろう。このキャンペーンが庶民感覚をくすぐるもうひとつの理由としては、あまりに強大なもの(米軍だの国だの)を相手に、実現性の少なそうな不満をぶつけるよりも、時勢に乗っかって「弱いもの(農家)いじめ」をした方が楽だし、民衆同士が罪をなすりつけ合うようにするのも「政策」のひとつなのかもしれない。かくして「新住民」は農家にいら立ち、農家は「新住民」にいら立ち、という関係が作り出されてくる。

#### ④ 過密と過疎

そもそも都市問題の根本は、過密と過疎なのである。日本中が横浜のような状態になっているわけではない。一方では働き手を失い、人も寄りつかないような村があるにもかかわらず、このような矛盾が「経済効率」の名のもとに放置されているのだ。一〇都市などという似たような都市とばかり交流しないで、横浜とは正反対の過疎地と交流してみたらどうだろう。過疎地は大都市の水源であった

り原発用地になったりして、都市のツケが大部回っているはずだから、都市の画像が逆に浮き掘りになるだろう。

「資本の効率性」から考えれば、都市を過密にしておいた方がいいのかもしれない。「経済大国」日本も、この効率主義によって築かれたのだ。だが、効率によって失われたものを差引いてみると喜んではいられない。

#### ⑤ 「安い輸入農産物」の宣伝

かつて戦後の日本でまだ米が不足していたころ、政府は、アメリカから輸入される安い小麦を使ったパン食を国民に奨励した。「パンを食べると頭が良くなる」という説を唱える学者までが表われ、国民にはすっかりパン食が定着したと思うや、今度は食管赤字をのり切るために、「米を食べなさい」と、あれやこれやの方法で、「パン食より米食の方が優れている」という弁明を行っている。「輸入農産物の方が安い」というマスコミを使った宣伝も、一体いつまで長続きするところか。新鮮さを失ってビタミンが低下し防カビ剤を使ったような農産物が身体に与える影響を考えると、予防医学的見地からいっても、日本人にかかる医療費の面での支出からいっても、本当に「安く」つくのか?そのうちまた、中東情勢が変れば、「輸送に石油をムダ使いする輸

入品はやめよう」などという「節約キャンペーン」が起こらないとも限らない。

#### ⑥ 見えにくい真の農家の姿

以下都市農業のいくつかの事例を紹介していくわけだが、私の紹介できる事例は、都市農業の存続のために人並み以上の努力を払っている人達ばかりなのだ。本当は、都市化の圧れきの中で、農業をやむなくやめざるを得なかった人達のことと載せなければ片手落ちになるだろう。だが残念ながら、広報担当者の耳にはいつてくる事例は、「大本営発表」とまではいわれないが、「優秀」な事例ばかりなのである。農政は、「落ちこぼれた」農家には冷たいものらしい(だから本当の「ウミ」を切開できずにこの原稿が終わってしまいうそである)。私が「耳学問」で聞いた話しを二つばかりあげておこう。

住宅公団の巨大開発に引っかけ、土地を売り渡した農家のおばあさん。小さいときから見慣れ、住み慣れた地形は跡形もなく、家にもついていること以外やることもない。やり慣れた農業もできずとうとう頭が変になってしまったという話。港北ニュータウン内で土地を売り渡して大金がころがり込み、いい気になって湯水の如く使っているうちに金が底をつき、農業する土地すら買えず途方に

れる杜子春まがいの話。「落ちこぼれた」農家の面倒など農政サイドで見るともならないから、農政サイドで把握できる農家はごくひとにぎりの優良な農家になってしまふ。本来なら「落ちこぼれる」農家が出ないように手を打つことが、農政の役割なのかもしれないが。

#### 二 横浜農業の実例

#### ① 港北ニュータウン内の農業専用地区

昭和四十一年から始まった港北ニュータウン計画は、農業専用地区構想を生み出した。ニュータウンは行政主導型の巨大開発であり、この中で、農業を一定地区に集団化して残すことにより、農地のスプロール化(農業の崩壊に歯止めをかけようという企図をもったものである。いわば都市による農地の「囲い込み」であり、放置して壊滅を待つよりも、むしろ積極的に囲い込まれることによって、困い込んだ都市側に、農業の存続の条件を提示し必要な負担を求めようというものである。

#### ② 池辺農専地区

池辺農専地区(四十四年指定、面積六〇ha、農家戸数一八八戸)は、東方農専地区と並んで、ニュータウン内で最大の面積をもつ。しかし兼業率は六四%と高く、同ニュータウン内の新羽大熊農専地

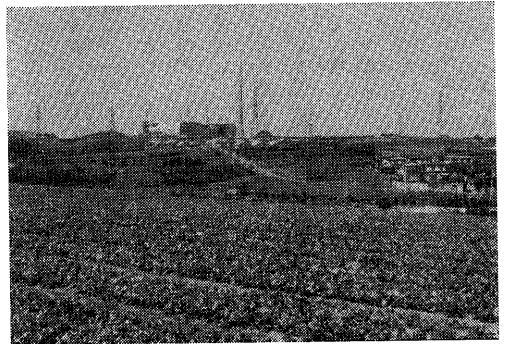
区(兼業率二八%)と対象的である。池辺では、野菜、植木、花きなどが作られているが、畜産はない。住宅地に悪臭を流さないための浄化槽の設置費用に莫大な資金がかかるのを理由に、希望者があきらめたということであった。「有機農業」が声高に叫ばれている割に、畜産をめぐる環境は厳しいのだ。

「起工から一〇年たってひとつの節目を迎えた現在、宅地並み課税問題で市街地の農地が大振れに振れたとき、農専の指定を受けたこの地域では、営農基盤の安定を痛切に感じているのではないかと、土地改良区の理事長である元木文雄さんはいう。

基盤整備も終わり、農作物の植えつけられたゆるやかな起伏のある農地の高台に立つと、目にとまる障害物は、建設中の清掃工場と、その手前の「不二塚」と呼ばれる小さな山だけ。その下には八棟のガラス温室が建てられ、トマトの水気耕栽培や花き栽培が行われている。都会の生活の中で、これだけの空間的広さを味わうことは、まず他の場所では不可能なことだ。農家の家すらない。車での通勤農業だからだ。

ニュータウンには、まだ入居者は少ない。全部の入居が終われば、そのときの人口増は三〇万人といわれている。ニュータウン内で土地を数カ所にまと

写真-1 池辺農業専用地区



めるためには、大規模な土地の交換分合が行われた。自分の土地を手放し、その代替地を他に求める。ニュータウン農専内の農家だけでも六百数十戸だから、この十数年は険しい道のりであったろう。今は、嵐のあとの静けさなのかも知れない。

「農家は、地球をカンパスにして絵をかく」と語る元木さんは、まさに「花つくりの詩人」である。息子さんは後継者として共に働きながら腕を磨いている。

② 全市に拡大された農専

四十三年のニュータウン内農業対策要綱は、四十七年、農専地区設定要綱として全市に拡大された。調整区域内の二〇

ha以上のまとまった農地に対して、農家の希望があれば農振地域に指定して国・県費を導入し、足りない分について市単独の補助を行って、永続的に農業を続けようとする農家の生産基盤を守り、都市における食糧と緑の供給に役立たせようというもので、現在市内では一九カ所、八二四haの農専が指定されている。ここではその中から、二つの特徴ある農専地区を取り上げてみよう。

⑦ 水取沢農専地区

(ア) 山林との共存

池辺が、市街地にとり囲まれた農専であるのに対し、水取沢農専地区(四十八年指定、面積二〇・九ha、農家戸数二四戸)は、円海山につながる里の一角であり、「水取沢市民の森」につながっている。水取沢、釜利谷、金沢、瀬上の四つの市民の森は、共に円海山の一部で地続きであって、この中を通る道は、鎌倉天園に抜けるハイキングコースとしてよく知られている。それだけに、市民の森の利用者も多い。

市民の森は、一地区五ha以上の山林について、この山林の所有者から市がこの土地を借り受け、固定資産税、都市計画税相当額と樹木損傷額を奨励金として交付するもので、管理は地元「市民の森愛護会」に委託されている。しかし、「市民の森」という名称が、利用者に、

写真-2 水取沢農業専用地区

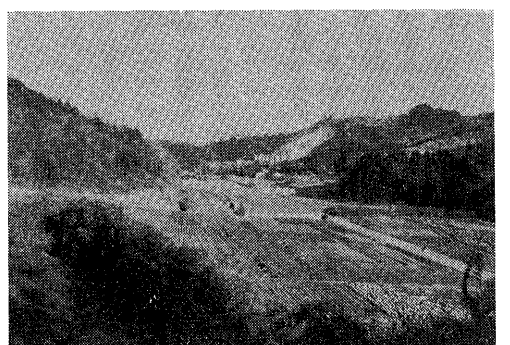


写真-3 傷つけられた「市民の森」



あたかも公共の施設であるかのような印象を与えるのか、日本人は公共のマナーに疎いことを反映し、利用者が無自覚にゴミを捨てたり、竹のこ、山野草などを根こそぎとっていったり、土を掘って車

で運んでいくような被害が絶えない。公共の施設であってもこのようなことは許されないが、ましてや個人が所有する土地であるから、このような事態が頻発すれば、所有者は山林を開放することに嫌気がさしてしまうだろう。心ない市民の行為が、数少ない横浜の緑をますます破壊していく結果になっている(写真1、2、3)。

#### ④直売農業

三方を静かな山林に囲まれた水取沢農専地区の特徴は、農産物のすべてが市場に出荷されず、京浜急行杉田駅近くの直売所で売られることである。直売の良さは、市場価格の変動にもさほど振り回されずに、自分で納得いく価格がつけられることである。それに、農家が交替で直売所に出るので、消費者の好みや反応も直接わかる。水取沢では、夏果菜のトマト、キュウリが代表的なものだが、直売なので、一年中さまざまなものを栽培している。

野菜は鮮度によって味が大きく変わるが、取れたその日に消費者の手に渡るといふ強みと、杉田直売所一〇年の歴史の重みが、固定客をふやし、経営を安定させる基盤となっている。

ちなみに、直売農業は、一年を通じて消費者の要求にこたえて休みなく、さまざまなものを栽培しなければならず、勞

働密度は高いということだ。

昔の「山合いの村水取沢」は、土地基盤整備によって全く面影を失い、近代的な姿に生まれ変わってしまった。五十四年には共同育苗温室も建てられ、五十六年には灌漑用の井戸も掘られた。昔は野菜を洗えるほどのきれいな水の川が流れていたのだが……。住宅地の進出によってその光景はもう見られない。

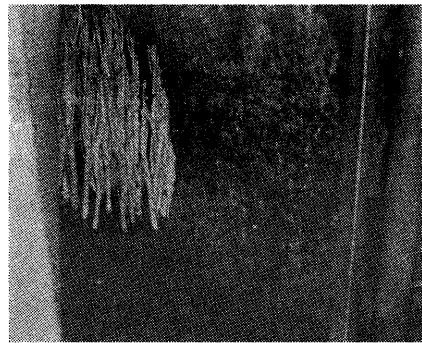
#### ④上瀬谷農専地区

上瀬谷農業専用地区(五十二年指定、九二ha、農家戸数一〇八戸)は、米軍の上瀬谷通信施設(基地及び周辺を加えると中区のほぼ全体の広さにあたる)内部にある、市内最大面積の農専地区である。

「横浜市と米軍基地」(五十一年、総務局渉外部発行)によれば、同地区は戦前、海軍の倉庫施設として使用され、二十二年にいったん解除されて、農林省が開拓財産として地元農民に売渡手続きを進めていたところ、二十六年に再接収された。三十二年に市はこの地域を用途指定地域として市街地造成の施策を打出したが、その後、同施設側から電波障害の理由で、この計画をとりやめるよう要請があった。三十六年には地元民が、電波障害制限地域の設置に対し、撤回の実力行使を行っている。

地上には温室等の施設が一切建てられないために、農業の近代化にたち遅れる

写真-4 ウド栽培



ことを危惧した地元の島森高志さんら八農家は、地下でも作れて収益性のあがるものを自主的に研究、東京都武蔵野市周辺の「うど」先進農家から技術を習得し、関係方面への陳情を続けた。四十三年には、防衛施設周辺整備法によって地下のウド軟化栽培が認められた。その後ウド栽培は順調にのび、瀬谷の特産として、横浜、東京方面に出荷されている(写真-4)。

#### ⑤市街化区域内農業の事例

##### ①畜産の位置付け

横浜市における畜産農業は、和泉地区を中心とした戸塚区の養豚など伝統的な生産地があるが、農専事業の中にも十分に位置付けられていないように思える。化学肥料による土地の荒廃により、

有機質によって土を生き返らせることが必要となっているのに、その素材となる家畜のフンやワラは、高価なものとなりつつある。戸塚区の東俣野農専地区では、五十二年に堆肥センターを建設したのだが、周辺住民の臭気に対する苦情により、建物の改善が検討されている。

消費者がいくら「有機農業」を叫び、また畜産物が私達の生活に欠かせないものであっても、都市における生産については、野菜や植木、花などに比べ、その壁は厚いのである。

##### ②市街化の養鶏

緑区にあるN養鶏園(成鶏・育成鶏一万羽)は、市街化の住宅のど真中にある。近隣に二軒の養豚農家があったが、頻繁な周辺住民の苦情により、県外に立ち退いてしまったようだ。N養鶏園ががんばっているのは、卵がほとんど庭先で売れてしまうからだ。近所の人はもちろん、新鮮な卵を求めて車でまとめて買いに来る人もいる。要するに「固定客」が多く、これらの人々に期待されているためだ。鶏フンは、農協を通じて他の農家に還元されている。

しかし、第一種住専であるために、老朽化した鶏舎の建て替えを許可してもらえない。保健所からは、悪臭を出さないように指導が来る。悪臭をなくすためには建て替えや改修などが必要だ、八方ふ

写真—5 市街化の養鶏園



のリサイクルの中で畜産をもう一度見直し、位置付ける視点が必要なのではないか。

### ◎市街化の農業

永島寛治さん(三一歳)の名前は、花の品評会の受賞者の中にたびたび登場する。よほど花つくりのうまい人なんだなと思って会ってみると、若いオソソリティーのイメージにはほど遠い。どちらかというと童顔で全く飾り気や気負いのない人だ。鶴見区の市街化区域に住んでいて親は野菜を作っているが、彼はそれを継がず、自分の力で花つくりのり出した。農家の後継者の中には、このように親のやっているものを継がずに、自分の好きなものを自力で始めていく青年も少なくない。永島さんも、花作りが好

きであった。「好きこそ物の上手なれ」で、彼も若いときから優秀な作り手となり、若い農業者たちが視察に訪れることもあった。

土と緑の少ない都市生活の中ほど花の需要は大きいのである。若者たちが花の経営にのり出すのは、こうした都市の状況を見通してであろう。家庭のみならず、今やビルの片隅にまで針植えが置かれている。

永島さんは、花の仲間たちと一緒に、区役所で行われた園芸講座の講師にもなった。

よく農家の人は、野菜を「自分の子供のようにだ」ということがある。永島さんも、花の成長する姿を観るのが本当に好きなのである。「しかし」と永島さんは

考える。「花を作るだけでは本当に安く買いたたかれてしまう」永島さんは、今花を売る店をもちたいと考えているのである。

鶴見区というと、連想するのは石油コンビナートの工場地帯、川崎と同様、公害のイメージはまぬがれない。しかし、実際には、永島さんなどのように、市街化区域の中で農業を継続している人は予想外に多い。シュンギク、ホーレンソウ、コマツナなどの軟弱野菜も、東寺尾を中心に市街化の中で栽培されている。また、獅子ヶ谷には市民の森がある。

横浜が鉄とコンクリートの味気ない街になってしまいう前に農業や山林に対し、社会的な価値を与えるべきであろう。

〈緑政局農政部農政課農業団体係〉

## ② 横浜を歩く

編集部

さがりである。せっかく後継者を育てていながら、その前途は厳しい。畜産に関しては、「都市への緑の提供」というお題目も通用しない。自然と農業

- 一 横浜に農業?
- 二 都市に生きる農業
- 三 都市農業を支える人
- 四 地域の中で考える
- 五 市街化区域の農業